

来福丸は下記に紹介される川崎重工のストックボートとして建造されたもので、下記資料に引用する。
九十年史—川崎重工業小史 38~40 頁 引用

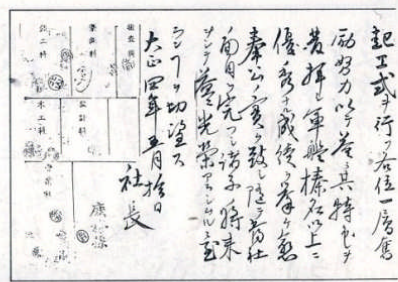
ストックボートの建造

第一次世界大戦が勃発したとき、当社では巡洋戦艦「榛名」が艤装工事に入っていた。翌大正四年（一九一五）四月に「榛名」を海軍へ引き渡すと、その翌月から超弩級戦艦「伊勢」（三万二二六〇排水トン）の建造が始まった。「榛名」建造の設備と技術が生かされたので、「伊勢」の建造工事はスピードアップされ、起工から一年六カ月で進水、艤装も約一年間で完了し、六年十二月に海軍へ引き渡された。

この間の大正四年、二等駆逐艦「梅」「楠」を四カ月間で完成、短期建造の記録を残した。その後、八年までに駆逐艦七隻・ローレンチ型潜水艦二隻を建造している。

一方、商船の建造も活況を見せた。大正三年に建造した日本郵船の貨客船「八阪丸」（一万九三三総トン）を初め、四年だけでも八隻を受注、六隻を竣工するといった繁忙ぶりであったが、この時期、当社の造船史に新しいエポックを画したのは、ストックボートの量産であった。

これは、第一次世界大戦下の世界的な造船ブームを背景に、世界の情勢に明るく、しかも積極経営をモットーとする、いかにも松方社長らしい着想と英断によるもので、当時の標準型と目された五〇〇〇総トン級（九〇〇〇重量トン）貨物船を中心に、大掛りな見込生産を開始したのである。大正



*地中海に沈んだ八阪丸

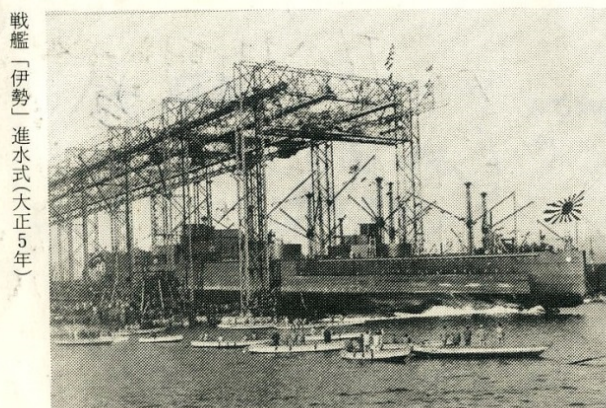
第一次世界大戦中、ドイツの潜水艦Uボートは、世界の海に出没して連合国側の艦船を襲った。とりわけ、開戦間もない大正三年九月、北海でイギリスの装甲巡洋艦三隻（いずれも一万二〇〇〇トン）を、数時間内につぎつぎと撃沈した話は有名であるが、当社が大正三年に建造した「八阪丸」も、翌四年十二月、地中海でUボートに攻撃され、巨額の金塊を積んだまま沈没、セーシヨナルな話題をまいた。

五年建造の「第一大福丸」（五八六九総トン）を第一船として急ピッチに建造され、十五年までの一一年間に九六隻・五五万八六九四総トンが量産された。年度別の建造実績は（表2）（49ページ）に示すとおりであるが、これは当社がこの期間に建造した商船一〇六隻（五九万七〇六八総トン）の九四パーセントに相当する。

これらのストックポートは、大戦中、好況の波に乗り、三二隻が建造中に売買契約が成立した。また、後述する船鉄交換契約によってアメリカ政府に引き渡した一二隻を含めて、二五隻がイギリス・アメリカに売却されたが、このうち、アメリカのステーツ・マリン・アンド・コマースヤル社に売却した一隻と、イギリスのファーンレス・ウィジー社へ売却した一二隻は、松方社長自身が現地で商談をまとめたものであった。

このように第一次世界大戦下の当社の商船建造は、ストックポート一色に塗りつぶされたといっても過言ではないが、これらの貨物船はまた、短期建造という点でも特色がある。

当時、五〇〇〇総トン級貨物船の建造には六〜七カ月を要するのが常識であったが、当社はこれらのストックポートを平均三〜四カ月で建造した。とくに大正七年に建造した「来福丸」（五八五七総トン）は、起工後わずか三〇日で完成、それまでアメリカの造船所が保持していた短期建



戦艦「伊勢」進水式（大正5年）

九十年の歩み

—川崎重工業小史

 川崎重工業株式会社

録を一挙に七日も短縮し、世界の造船業界を驚嘆させた。こうした高操業が続くなかで、当然ながら、生産能力の向上が要求された。このため当社は、大正四年以降、発電所・船台を初め工場設備の拡充を図ると同時に、従業員の増強に努めた。この結果、六年には従業員は二万一五〇〇人を数えたが、それでもなお労働力は不足ぎみであった。ちなみに大正六年下期から九年下期まで、当社としては最高の四〇パーセントという高率配当を行なっているが、当時の好況ぶりは、いかに想像を超えるものであったかがうかがわれる。

T629年下期
40%配当

九十年の歩み — 川崎重工業小史

昭和六十一年十月十五日発行

発行 川崎重工業株式会社

神戸市中央区中町通二丁目一番地一八

編集 九十年小史編集委員会

制作 ダイヤモンド社

東京都千代田区霞が関二丁目四番地二

